

<エッセイ：小特集「パンデミックに思うこと」> 中日米の狭間に生きる

著者	郭 海紅
雑誌名	日文研
巻	65
ページ	11-17
発行年	2020-09-30
URL	http://doi.org/10.15055/00007543

小特集「パンデミックに思うこと」

中日米の狭間に生きる

郭 海 紅

二〇一九年九月、楽しみにしていた日文研での研究生生活の幕がやっと開いた。土日開催の共同研究会、所長主催のランチミーティング、世界から集まる日本学研究者との対話、コモングルームで休憩する至福の一刻、教員が一回ずつ担当する日本研究基礎論の聴講、いずれもひらめきタイムであり、緊張したり、期待したりと、規律正しい日文研の暮らしであった。

ところが、新型コロナウイルス感染症の発生により、二〇二〇年は決して穏やかな一年ではなくなった。五月初めに読んだ『現代民俗誌の地平』の「刊行のことば」に「このシリーズで目論んだのは、ポスト・フェストゥムとしての民俗学ではなく、二一世紀への胎動となるアンテ・フェストゥムとしての民俗学である」という一文があった。「フェストゥム」とは何の意味か全然見当がつかず、電子辞書にも載っていないくて、ネットで検索しようやく分かった。木村敏という有名な精神科医が人間の心理的時間感覚を「祭りの前（アンテ・フェストゥム）」「祭りの後（ポスト・フェストゥム）」「祭りの最中（イントラ・フェストゥム）」の三つに分類し、医学の分野で注目されたという。「祭りの前」が総合失調症的、「祭りの後」が躁鬱病的、「祭りの最中」がてんかんのと考察されている。

もちろんパンデミックは期待されて起こるものではなく、祭りみたいに予定されたものでもない。突然発生し、さらに悪い方向へ向かってしまう出来事である。だが所定の秩序の打破と非日常との対面において、祭りと似通う心意や行動などが出てくる。ちなみに木村も「祭り（フェストゥム）は喜びであり、楽しみであると同時に、冒険であり、危険がいっぱいな場所である」と指摘している。以下に、自分自身の身の回りに起きた出来事とそれによる心情の変化を整理し、心理的時間感覚の分類にも目を配り、パンデミックに思ったことを綴ってみる。

一 アンテ・フェストゥム

二〇一九年一二月のクリスマスから二〇二〇年一月のお正月休みまでの丸二週間は、あるプログラムの応募申請書類の作成に追われた毎日であった。正月三が日もほぼ研究室に來ているS先生を見て、おのずから一種の仲間感覚が生まれ、励まされたような気分になった。年末年始の休みが終わり、日文研も元通りの人出になり、様々な打ち合わせや交流の風景がコモングルームに戻った。一月下旬のある日、昼過ぎにコモングルームで中国籍の先生たちが集まったのを見かけた。L先生に呼ばれ話の輪に入り、様々な話題に花が咲いた。日本語専攻の学生の日本語能力の低下傾向だったり、国際結婚における文化の差異及び広く一般的な婚姻維持の心得だったり、長崎出張で見かけた日中交流に関わる絵や写真や道具など実物資料の議論だったり、日常生活から研究まで話題は尽きず、コロナに関する話などほぼ一言も出ないまま、ただ和氣藹々とした雰囲気だったことを鮮明に覚えている。

一月二四、二五日の土日は、ちょうど中国の旧正月の除夜と元日の祝日となる。今回の旧正月は私にとって特別であった。というのは日本で過ごすことになっただけでなく、二日連続で

学術研究会が集中していたことと、息子から嬉しいニュースが入っていたからである。シンポジウムはそれぞれ関西大学と関西学院大学で行われたため、珍しく桂坂から〈脱出〉して、関西地区で名高い「関関同立」の大学を訪問できるのが嬉しかった。一年で一番賑わう時である中国の旧正月を一人で過ごすのはどうしても切ない気がするし、シンポジウムがあることで、心の穴が一気に埋められ、さらに不思議と研究における達成感と満足感も生まれる。ちなみに関西大学の方は、東西学術研究所言語交渉研究班が開催する「言語接触研究の諸相」という例会で、もう一方の関西学院大学は世界民俗学研究センターによって梅田キャンパスで開催される二回目の研究会となる。どちらも私が関心を持つ分野と研究者たちである。

当日、バス停に向かっている時に、息子からオンラインコールがかかってきて、サブライズが知らされた。彼はアメリカの高校での一〇ヶ月間の交換留学プログラムに参加するため、私が見に行くのとほぼ同時期にアメリカに渡航した。二〇一九年秋からずっとアメリカの大学の申請諸手続きに手を焼き、気分的にかなり焦っていた。中国の除夜当日の朝、やっと大学から一通目のオフアールを受け取った息子がどれほどホッとしたかは、コールの向こうの高ぶった声からもよく感じ取れた。これで安心して二〇二〇年九月からアメリカの大学に入学できるのだと、家族みんなで喜んだ。

二 イントラ・フェストウム

これまで長々とパンデミックと全く無関係なことが書かれていたと思われるだろう。しかし、それが二月に入ると、中国をはじめ、日本とアメリカが相次いで新型コロナウイルスにやられ、まさしくパンデミック状態に陥った。私自身を例にとると、夫と親は中国、息子はアメ

リカ、私は日本、まさに中日米の狭間で身近にパンデミックを感じ、翻弄される思いだった。中国には「コロナとの戦いは、中国は前半戦、海外は後半戦、私たちはフルコースだ」という、留学生とその親たちを皮肉った言い方があるが、これは私のような立場の者に対する歴然とした語り口ではないかと思った。

中国では、旧正月を境に全国一斉に外出規制を強化する態勢に転換した。夫や親のことが心配される。最初の一週間はまだ旧正月中に備蓄しておいた食料があるが、だんだん時間が経つにつれて、食料品の品揃え、外出時の感染リスク、全くの閉じこもりによる身体機能の低下、万が一病気を発症したときの病院の対処など、不安が強まるばかり。私にできるのはチャットを通じたこまめな連絡と、気分転換のネタをなんとか提供することくらいであった。幸い実家と婚家は同じ町にあるので、夫が自家用車による食料品の買い出しと配達を担い、感染リスクを下げることができた。そんな不安と非日常の中、中国では三月いっぱいまで新型コロナウイルスの全国的な改善を迎え、四月に入ると、学校や公園・施設の開放のほか、経済活動などが少しずつ回復の兆しを見せてきた。

その間日本にいた私は、三月二二日、東京で開催の日本女性民俗学研究会第七〇〇回記念例会「未来学としての民俗学」公開シンポジウムを拝聴する予定があり、東京大学のある民俗学者にインタビューする計画も立てていた。もちろん、これらは四月七日に日本政府が緊急事態宣言を行う前に中止となった。一方アメリカにいる息子は、もともとアメリカでさえほとんど知られていないノースダコタ州 (State of North Dakota) のある高校に配属されていた。中国人一人で、地元の人には閉鎖傾向にあり、留学生生活が半年あまり経った二月三月頃になると、さすがに孤独から生まれたストレスが限界に近づき、愚痴が増え、明らかな気分的落ち込みが見

えた。三月下旬にはアメリカの春季休暇が明け、高校もオンライン授業に変更された。ホームステイ先の家庭では、高校のスペイン語教師である女性の方は収入にそれほどの変化はなかったが、男性は屋外のペンキ広告の仕事をやっている、一週間目に家計の話を息子の前でも漏らす事態になった。だが二週目に入ると、アメリカ政府から大人一人当たり一二〇〇ドルの補助金が手早く給付されたという。家計の話もしなくなり、心配が和らいだ、と息子から聞いている。

三月から四月、さらには五月中旬を過ぎた段階で、パンデミックは引き続き深刻な有り様を引きずっていて、見通しは不透明である。日本とアメリカでは感染のピークを過ぎた兆しがあるものの、特にアメリカの場合、緩やかに感染が広がる状態から脱出していないのが現状である。息子の帰国航空券は三月と四月には全く入手できなかったり、日常茶飯事のように運航がドタキャンされたりして、困惑の毎日であった。同じプログラムに参加した男の子の父親は何とかして人民元六万元、日本円にして一〇〇万円弱の航空券を購入し、三月いっぱい息子さんを帰国させたそうである。当時その話を息子もどんな気持ちで私に伝えたか、羨ましいのか悔しいのか諦めか、複雑すぎて私にもよく把握できない。このエッセイを書き上げた今、息子もやっとロサンゼルスからアモイに帰国でき、アモイで隔離生活を送っている最中である。帰国できたことをみんなに祝福されたが、五月に入ってもアメリカからの帰国がまだまだ自由にならないことが分かった。日本も似たような状況で、在留期間や航空便が確定しないことによるハプニングが続き、予想外の色々なことに多くの外国人が悩まされていることは容易に推測される。日々事態と対策が変化する中、国内と海外の関係機関からあれこれ通知と規定が飛び交うことには戸惑いもあるし、心理的不安定感が増したのも確かであった。

三 ポスト・フェストウム

人類が辿ってきた歴史を振り返る限り、いくら邪悪なパンデミックでもいつか収束に向かっていくし、あるいは知らず知らずに日常に溶け込んでいくだろう。日本政府が最近よく口にす「長丁場」は、やはり新型コロナと長く付き合っていく、あるいは共存していく覚悟を呼びかける言葉だと思う。二〇二〇年四月九日から日文研は在宅勤務制度を開始し、その日のうちにいち早くカウンターパートナーのY先生から連絡と慰安の電話をいただいた。それから一ヶ月あまり経ち、図書館は一時的なサービスの縮減を一部再開に変更し、コモンルームの業務も幾度となく調整が実施された。以前の共同研究会は四ヶ月の間は全て中止。でもそんな中で嬉しかったのは、T先生の桂ゼミ「文学・文化史理論入門」が維持されていて、さらにネット飲み会の「居酒屋つぼゐ」もオープンし、色々勉強させていただいたことである。旧正月に参加したシンポジウムで知り合った関西学院大学のS先生からも、オンライン授業の案内が届き、日文研のレストラン赤おからも「出勤ご苦労様です」企画が持ち込まれた。図書館は時間外利用の形で私たちが自由に出入り可能にしてくれるなど、些細なことだが確実に日常の秩序と意識が保たれていて、落ち着いた研究生活につながったと考える。他に、家族間の絆や友人との情報交換などに基づくコミュニケーションの促進、コミュニティの形成も精神的な安らぎを与えてくれた。アメリカにいる息子に関して多くの友人が相談相手になってくれたり、学生を含め教職員一同で日文研のアイデンティティを構築していたりしたことはすべて、中日米の狭間でパンデミックに悩まされた私を支えてくれたと感謝する。

旧暦における二〇二〇年が開幕した頃に「可能であれば、二〇二〇年をもう一度スタートラインから新たに始めてほしい」という投稿が中国のSNS上で交わされた。その心情と思いは

まさに「あとの祭り」（ポスト・フェストゥム）。いわゆる「とりかえしのつかぬ」手遅れの意味で、木村敏が鬱病に関する独自の考えで使ったキーワードである。パンデミックがどんどん深刻になる中、自粛要請の解除または疫病の収束をみんながどれほど心の底から待ち望んでいるかは言うまでもない。これもまた、前夜祭を待ちかまえる「祭りの前」（アンテ・フェストゥム）の心理的時間感覚と似たり寄ったりである。このような、やや病理的なアンテ・フェストゥムの「先走り」の気持ちに流されずにじっくりと「祭りの当日」を待つか、もしくはパンドミックを日常体系の下に配置し、祭り気分にならないようにするかは、これから生きていく術の一つになるだろう。

投稿に際し、安井眞奈美先生また編集担当の先生方に丁寧なご修正をいただき、感謝の意を申し上げます、ここに記します。

（中国山東大学教授／国際日本文化研究センター外来研究員）

- （一） 岩本通弥・篠原徹など編『現代民俗誌の地平』、朝倉書店、二〇〇三年、二頁。
- （二） 『木村敏著作集3 躁鬱病と文化／ポスト・フェストゥム論』、弘文堂、二〇〇一年、四二七頁。